

オリジナル・ラブ

聖書の愛の物語

エイドリアン・エベンス

オリジナル・ラブ

聖書の愛の物語

エイドリアン・エベンス

Fatheroflove.info
adrian@life-matters.org

発行元



無料オーディオブックをダウンロードしてください。
<http://fatheroflove.info/book/view/original-love>

©エイドリアン・エベンス、2019

目次

1. オリジナル・ラブ	5
2. 恥じない者	10
3. 神のかたちによって造られて — 神聖なパターン	14
4. 魔女とその弟子	21
5. アガペーの約束された種	29
6. エロスの暴君なる子孫	34
7. 神の悲しみ	42
8. 祝福された人	47

1. オリジナル・ラブ

主イエスが山上の説教において語られた言葉の中で、人類が日々直面する重要な問題について触れられました。その一つとして、主イエスはこう仰せになりました。

あなたがたも聞いているとおり、昔の人々は『姦淫してはならない』と言われていた。しかし、わたしは言うておく。だれでも、情欲をいだいて女を見る者は、心の中すでに姦淫をしたのである。—マタイ第5章27～28節

キリスト教徒の男性にとって、この言葉は、自分が所持していると感じている正義感を打ち砕くような打撃を与えるように思われます。この言葉を通して、イエスは罪に縛られた人間の核心に触れています。心の純粋さを求める者にとって、この宣言は深い悲しみと悔い改めを引き起こし、生ける救い主を心から必要とする強い思いを抱かせます。イエスを知ることとは、イエスが女性を欲望の対象として見なかったことを理解することです。この真実を知ることによって、墮落した私たちも、心の中で本来の愛に立ち返ることができるという希望を持つことができます。

アダムが初めてイヴを見た時の出来事について思い描くと、多くの男性は「うわー！すごい！」と言っただろうと想像しがちです。しかし、これは聖書に人の墮落した心の傾向を当てはることになります。多くの男性は、墮落した本性が支配することを恐れ、楽園の情景を思い浮かべることすらできません。

アダムがイヴを見た時の心にあった愛を理解するには、聖書の言葉をただ素直にを読むだけで十分なのです。

主なる神は人から取った肋骨で女を造り、人のところに連れて来られた。(23) そのとき、アダムは言った。「これ

こそ、わたしの骨の骨、わたしの肉の肉。男から取られた
のだからこれを女と名付けよう。」—創世記 2 章 22-23 節

アダムとイヴの目が合った瞬間の彼の言葉によく注目してください。
。「これはわたしの骨の骨、わたしの肉の肉。男から取られたのだからこれを女と名付けよう。」アダムの最初の愛の根拠は、彼がイヴを美しい存在として「欲した」ことではありません。彼は、自身の命から生まれ、自分の心のそばからやって来た者を見ていたのです。それゆえに彼は、彼女を第二の自分として大切に思ったのです。使徒パウロもこのように述べています：

それと同じく、夫も自分の妻を、自分のからだのように愛さねばならない。自分の妻を愛する者は、自分自身を愛するのである。(29) 自分自身を憎んだ者は、いまだかつて、ひとりもない。かえって、キリストが教会になさったようにして、おのれを育て養うのが常である。(30) 私たちは、主の肢体なのである。—エフィソ 5 章 28～30 節

ですから、アダムがイヴに「あなたは私の肉と骨からの者です。」と言ったように、第二のアダムも教会に「あなたは私の肉と骨からの者です。」と言います。主は私たちが何かを差し出すからではなく、私たちが主から生まれたからこそ、私たちを愛しておられるのです。なんと素晴らしい愛でしょう！

さらに、創世記 2 章の物語を注意深く読むと、女性が創造される前に、アダムがすべての被造物の管理者として園に配置されたことが分かります。彼女が彼から造られた時、アダムは自ら所有するすべてを彼女に与え、共に管理する者となりました。もう一度言いますが、アダムは自分が所有し支配したいという欲望したのでしょうか。自分の財産で彼女を手に入れようとしたのでしょうか。いいえ、それはアダムの心にあったイヴへの愛ではありません。彼の心にあった愛は神から来る愛でした。神は愛なのです。

しかし、それはどのような愛でしょうか。ギリシャ語ではアガペーと呼ばれ、これは慈悲深い愛、つまり受け取る側の持つ性質に左右されない愛を意味します。一方で、現代の「愛」の概念には「エロ

ス」が使われますが、これは聖書では決して推奨されていません。エロスとは、美しく、高貴で、愛らしいものへの愛です。エロスとは、私たちの目、食欲、そして肉体を喜ばせるものを所有し、楽しみたいという欲望です。士師記 14 章 2～3 節とサムエル記第 2 : 11 章 2 節を参照してください。

イヴが禁断の果実を持ってアダムのもとに来た時、彼女は神がアダムに与えようとしなかった何かを持っていました。この果実によって、イヴはアダムが持っていなかった何かを手に入れました。彼女は新しい思考で心を満たしたまま、その木から来たのです。サタンは巧妙な言葉でエバを欺きました。サタンは彼女自身に美しさを持つと語りかけました。彼は彼女を、アダムからの継承者としてではなく、自ら美しさを備えた存在として扱いました。これによりイヴは、自らの美しさの源を忘れ、自惚れてしまいました。女性の美を見て、何かを得ようとする心――それはサタンによって感化された心です。

反抗心に浸るイヴが夫のもとに来たとき、何か奇妙でありながらも刺激的な魅力がありました。彼女の新たな自我、自己主張、自信、野心は、アダムを惹きつけました。それは奇妙でありながらも、興味深いものでした。アダムは果実を口にすることで、神の律法に背いただけでなく、新たな律法を確立しました。――それは、息子たちが皆、女性に何かを与えてもらうことを求める律法でした。男性は、女性こそが生命の源であり、活力の道を持つという感覚が刻み込まれることになります。こうして聖なる女性への崇拜が始まり、新たな隷属の象徴として男性の心に刻まれたのは、裸の女性の姿という想像でした。この想像は、多くの男にとって、園での取引の象徴となったのです。男は女に命を与えてもらうよう求めるのに対し、女は男に命を与えてもらうよう求めるのです。この取引において、男の愛は悲劇的にアグペーからエロスへに変化しました。それは、見返りを求めずに与える愛から、自己の快樂のためだけに惹かれる愛へと転化したのです。

自然な心では、この新たな愛が女性にとっての向上となると考えるかもしれないが、実際には女性を奴隷化するものでした。男性に目を楽しませ、惹きつけるためには、女性は男性に与えるべき何かを備えていなければなりません。ファッションや身体の改造という文化が生まれ、女性は、自らの力で、望む男性に自分の魅力を

示そうとするのです。そして、女性は知らず知らずのうちに、男性から受け継いだものを拒絶し、自らの力で男性に近こうとします。その結果、男性にとっても女性にとっても空虚な経験となります。男性は絶えず欲望に駆られ、女性は永遠に不安を抱えたままになるのです。

アダムがイヴに抱いた本来の愛は、彼女自身の中に持つものに基づくものではなく、彼女がアダムから生まれたという事実に基づくものであったことに、よく注目してください。アダムは、イヴがアダムから生まれ、それゆえにアダムの一部であったからこそ、与えられたすべてを彼女に捧げました。そして、二人は互いに負うべき責任を完全に理解していたのです。これがアガペー、すなわち本来の愛です。

また、アガペーが純粋であることを確信する唯一の方法は、受け手がそれ自体に愛を引き起こす本質的な要素を何も持っていないことを確信する必要があることです。もし女性が男性から受けたものではない何かを内に持っていたとしたら、エロスが目覚め、女性は男性を最初に惹きつけたものを維持し続けなければならない、これは死へと導くのです。神の目的から外れた人間のいかなる性質も、はかなく永続的ではなく、そのような性質を生み出したり要求したりすることに基づいた愛は決して持続することはできません。神の計画では、女性は自分の価値や適合性を男性に証明する必要はありませんでした。思い出してください、アダムがイヴを愛した理由は、一彼女は私の骨の骨、肉の肉—だからでした。これがオリジナル・ラブの根拠です。

そして、アダムからイヴが受け継いだものが、彼女に対する彼のアガペーの保証であったように、キリストが父なる神から受け継いだものも、キリストに対する父のアガペーの保証です。私たちは彼らのかたちに似て造られたのです。父はこう述べました。

すると天から声が聞こえた。「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である。」—マタイ 3 章 17 節

父なる神が御子に対してアガペーを持つ唯一の方法は、御子が父からすべてを受け取ったという確信があることです。それが慈愛を確かなものとする唯一の方法です。もし父なる神が御子の目を見つめ、全能であるがゆえに、あるいは全知であるがゆえに愛するのであれば、それはアガペーではなく、むしろエロスの愛です。しかし、聖書は神が御子にすべてを与えたと記しています。これは神の愛が純粋なアガペーであり、神が私たちと分かち合う愛であることを明らかにしています。私たちがアガペーをもって愛するのは、神がまず御子のアガペーをもって愛されたからです。

私たちは「アガペー」愛するのは、神がまず「アガペー」で 私たちを愛されたからである。－ヨハネ 4 章 19 節

本来の愛のゆえに愛する神を礼拝するなら、私たちも同じように愛するでしょう。私たちは、見るものそのものになっていくのです。しかし、すべてのものを与えられ、父なる神の慈しみ深いアガペーの愛の確信に安らぐ御子を礼拝するなら、私たちもこの愛のかたちに変えられ、神が御子を愛するように私たちも人を愛することができるのです。

私たちの神はアガペーであり、エロスでは一切ありません。

2. 恥じない者

人間関係に関しては、統計がすべてを語っています。多くの国で結婚の 50%以上が離婚に至っており、多くの人々がその関係に期待していたものを見出せなかったことを明らかにしています。結婚生活を続けてる人々の中にも、同じように孤独な経験をする場合が多いのですが、彼らは、より良い選択肢が見つからない、あるいは変化を恐れているという理由で離婚に踏み切れないのです。人間関係におけるこのような有害な経験から生じる失望、混乱、不満、怒り、そして悲しみの波は、1980 年代に私が 10 代の頃に心を奪われたある歌の問いかけに要約されています。

そもそも愛とは何でしょうか？

そもそも誰かが誰かを愛しているのでしょうか？

前章では、「愛とは何か？」という問いに、アダムが初めてイヴを見た時に何が起こったのかを通して考察しました。アダムが「これは私の骨の骨、私の肉の肉だ」と言った時、彼がイヴを愛した理由は、彼女が何かを所有していたからではなく、彼から生まれ、彼の思い、喜び、願いを理解し、彼と共に歩む仲間となる力を持っていたからでした。この愛の純粋さ、潔さ、そして自由さは、以下の言葉に集約されています。

男とその妻は、二人とも裸であったが、恥ずかしいとは思わなかった。一創世記 2 章 25 節

ここで使われている「恥ずかしい」という言葉には次のような意味が含まれています。

- 失望する
- 遅れる；期待が満たされないことを意味する
- 困惑、混乱する
- 乾燥し、荒れ果てる

アダムとイヴが経験したことは、私たちが望むすべてでありながら、ほとんどの場合、たとえ達成できたとしても、決して得られないものでした。喜び、自由、充実感、純真、親密さから始まり、失望、混乱、そして荒廃へと向かうこの道筋は彼らが本来取るべきでは

なかった果実を取って食べたという行為の中に描かれています。この行為こそが、私たちをアガペーからエロスへの転落を引き起こしたのです。

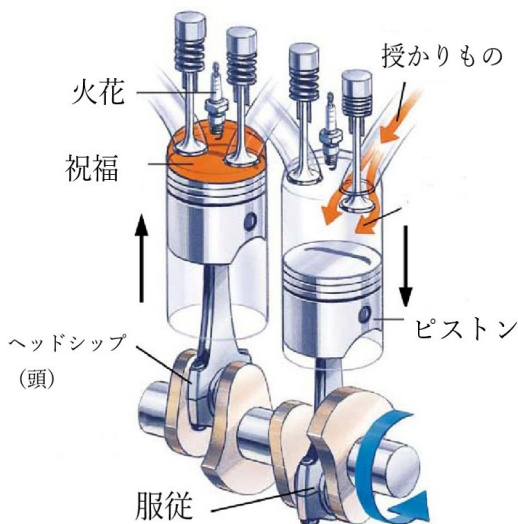
私たちは、古代の宝物を探す考古学者のように、この聖書の物語を読み解く必要があります。時間の砂を丁寧に払いのけ、歴史の事実を見つけ出すことで、それが私たちの存在に意味を与えてくれるのです。アダムとイヴが共有したこの愛は、神が彼らの永遠の親密さと幸福を保証するために、注意深く築き上げ、育んだものです。私たちの最初の両親の起源そのものに、失望を隠さないこの恥じらいのない愛の秘密が隠されています。以下の点に注意をしてください。

- 神はアダムを創造し、楽園に置かれた。
—創世記 2 章 7 節
- 神はアダムをこの園の管理人、支配者にされた。
—創世記 2 章 8～15 節
- 神はアダムに命の木と知識の木について命じた。
—創世記 2 章 16 節
- 神はアダムに伴侶の必要性を感じさせる状況を整えた。—創世記 2 章 20 節
- 神はアダムを眠らせる（ヘブライ語では「死」を意味することもある）—創世記 2 章 21 節
- 神はアダムの肋骨を取り、その生きた肋骨から女性を形作られた。創世記 2 章 22 節
- 神は女性を復活した男のもとへ導かれた。—創世記 2 章 22 節

この一連の出来事は、私たちの先祖であるアダムとイヴが持っていた恥じることの無い本来の愛の秘密を理解する上で極めて重要です。イヴが持っていたものはすべて、神がアダムを通して彼女に与えたものでした。アダムが持っていた唯一の主権と支配権は静かに終わりを迎え、彼は伴侶を伴い新たな命へとよみがえったのです。アダムが眠りについた時、その心は、彼を理解できる誰かへ愛を注ぎたいという願いに満ちていました。そして目覚めた時、彼は神から受けたすべてのものを捧げることができる人を目にしました。アダムはそのすべてを女性に与えました。彼女はアダムの肋骨、遺伝子、心臓、家、楽園、すべてを手に入れました。彼女はアダムが眠り

に落ち、自らの一部を差し出して眠りについたことを知っています¹。それに応じて、女性は自分が与えられたすべてのものを見て、夫の目を見つめると、感謝と喜び、そして幸福で心が満たされました。彼女は、自分が持っているものはすべて夫を通じて神から与えられたものだということを知りながら、一瞬一瞬を生きています。

男と女の間のこの交わりは、泉のように溢れ出し、決して恥じることのない永遠の愛の営みによって持続されるのです。この素晴らしい愛の営みの秘密、鍵、中心、軸、心、そして真髄は、自分の起源と、どのようにして自分が生まれたのかを知り、思い起こすという単純な事実の中にあります。アダムは、自分が創造され、園に置かれた指導者であり主権者として、自分に与えられたすべてのものを世話し、守り、忠実に管理する使命を与えられたことを覚えてる限り、自分に与えられたすべての祝福を、使命に従って注ぎ込み続けたでしょう。そして、女性が夫からの祝福をすべて受け取り、夫に愛と敬意、喜び、信頼をもって従い、夫の導きと支配に対して尊敬を示すなら、まるで井戸のそばに立つ女のように、彼女は夫の心から、以前よりもはるかに大きな祝福を引き出すのです。



この愛の動きは、二つのピストンを持つモーターの動きにたとえることができます。第一のピストンはアダムで、彼から生まれた真の伴侶との出会いに歓喜し、点火して祝福の波を放出し、この波は喜

¹ このアダムの眠りは、イスラエル国家を生み出したアブラハムの眠りとして歴史に響き渡り、教会を生み出した墓の中のイエスの眠りも、宇宙を生み出すために父が払った代償として響き渡ります。

びの点火燃料を第二のピストンの空洞に送り込み、同時にクランクシャフトを回転させます。すると第二のピストンが天井に向かって上昇し、愛の応答が点火されます。第二のピストンからの応答は第一のピストンを高め、その空洞を喜びに満ちた服従、栄誉、尊敬で満たします。そしてこれがさらなる祝福を推進し、祝福の生成と受け取りのサイクルが永遠に続くのです。何と素晴らしいデザインでしょう。これこそが、私たちが「神のかたち」に造られた世界の動きの象徴なのです。－創世記 1 章 27 節

ここでもう一度強調すると、この永遠の愛の営みは、人々が自らの起源を知り、真のアイデンティティと神の創造物における自らの位置を理解する必要があるということです。アダムは自分が園の長であり、神から与えられたすべてのものが自分の管理下にあるものの、それでもすべては神に属していることを忘れない限り、彼はそれらを守り続け、そのすべての祝福を注ぎ続けるでしょう。そうすることが彼の義務であり、名誉であり、喜びだからです。また、イヴは自分の命がアダムから来ていることを忘れず、今彼と共に支配者となったとしても、彼女が目にするすべてのものは、神の意志によって夫を通して与えられたものであることを理解し続ける限り、イヴは祝福の輪を完成し、二人は決して恥のない関係を保つことができたでしょう。

3. 神のかたちに造られて ― 神のパターン

神は言われた、「われわれのかたちに、われわれのかたどってに人を造ろう。」…（27）神はご自身のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女として創造された。創世記 1 章 26～27 節

創世記 1 章と 2 章を注意深く読むことで、アダムとイヴの関係がアガペーの愛による絶え間ない動きの中にあったことが明らかになります。この愛の原動力となるのは、人それぞれが自分がどこから来たのか、そして何を受けてきたのかを思い起こすことでした。神から注がれた愛は滝のように流れ、アダムに注がれ、アダムからイヴへと注がれ、その感謝の思いが、再びその源である神へと返っていくのです。

聖書は、この最初の人間関係は神と御子のかたち、あるいは模範であり、私たちは神と御子の似姿に造られたと教えています。では、この模範について、私たちは他に何を学ぶことができるのでしょうか。

しかし、私達が信じる唯一の神は、父なる神であり、万物はこの神から出てこの神へ帰る。また私たちには唯一の主イエス・キリストがおり、万物はこの主によって存在しており、私たちもこの主によって存在している。

ーコリント 8 章 6 節

ここで、父なる神は「万物は神から出ている」と表現され、すべての生命と祝福の源であると語られています。そして御子は「万物は神によって出ている」とされ、すべての生命と祝福の経路として表現されています。「源」と「経路」の区別は、アガペーの愛の原動力が永遠に動き続けるために重要なのです。なぜでしょうか。子は、父が万物は神から出ていることを認識し、自分にすべてのものを与えてくださったことに対する父への感謝の気持ちを常に抱いています。父は子を自分から来た者に見なし、子に祝福を注ぎ、すべてのものを与えたいと願っています。なぜなら、与えることこそが父のアガペーの本質であり心だからです。この愛の原動力は、父と子が

「源」であり「経路」であるというアイデンティティを保つ限り、祝福の泉を注ぎ続けるのです。

この祝福の泉の滝のような性質は、次の言葉に表れています。

しかし、あなたがたに知ってほしいのは、すべての男の頭
はキリストであり、女の頭は男であり、キリストの頭は神
であるということです。コリント第一 11 章 3 節

父なる神がキリストの頭であるように、男は女の頭とされています。これは、神のかたちに造られたことの重要な意味です。「頭」であるという言葉の用法は、創世記の中で使われている以下の記述にも関連しています：

そして川がエデンから流れ出て園を潤し、そこから分かれ
て四つの川となった。－創世記 2 章 10 節

神の規範では、頭が祝福の源であると表現されています。それは、天の父がすべての祝福の源だからです。その祝福が御子に渡されると、御子は祝福を注ぐために男の頭となります。男はこの祝福を受け取り、妻に祝福を注ぐ頭となります。妻は誰に感謝の思いを向けるでしょうか。彼女は、自分に祝福を届けてくれた全ての者、つまり神と御子と夫に感謝を表すのです。この祝福の流れを保ち続ける鍵は、自分の頭が誰であるかを知ることにあります。あなたの「源」は誰なのか、そして誰が「通路」なのか。その違いを認識することで、祝福の循環が途切れることなく続きます。

聖書を注意深く読み進めれば、この神聖な頭と服従の規範が、多くの箇所でも明らかにされていることに気づくでしょう。

源 - 誰のものか	チャンネル - 作成者	参考文献
父	息子	コリント第一 8 章 6 節 コリント第一 11 章 3 節 ヘブライ 1 章 1～3 節
夫	妻	創世記 3 章 16 章 コリント第一 11 章 3 章 エペソ 5 章 25 章 ペテロ第一 3 章 1 節
父	母	出エジプト記 20 章 12 節 エペソ 6 章 1 節 コロサイ 3 章 20 節
母	子供たち	テモテ第一 2 章 15 節
キリスト	夫	コリント第一 11 章 3 節
キリスト	教会	エペソ 5 章 25 節
長老/牧師	群れ	ペテロ第一 5 章節 テサロニケ第一 5 章 12～13 節
国王/総督	臣民/国民	ローマ 13 章 1～3 節 ペトロ第一 2 章 13～14
聖書	牧師/長老	テモテ第二 4 章 2 節 ペトロ第一 5 章 2 節

この神聖なパターンに完全に従うほど、私たちと家族により多くの祝福が注がれることになります。例えば、父母を敬うとき、聖書は「長寿が約束されている」と語ります。また、私たちの上に立つ者を愛をもって尊ぶとき、私たちは彼らの御言葉の説教と神的生活への勧めによって祝福を受けるのです。

この神聖なパターンを通して私たちに流れ込む喜び、幸福、そして交わりといった直接的な祝福に加えて、「保護」という間接的な祝福もこの仕組みによって受け取ることができます。いずれの場合も、「誰の手によって」物事がもたらされるかは、「誰の手から」物事がもたらされるかの保護の下にあり、その権威を持っています。子供がどれほどの保護を受けられるかを示す例として、次のことが挙げられます。

1. 子供は母によって守られ、
2. 母は夫によって守られて、
3. 夫は警察によって守られ、
4. 警察は政府によって守られ、
5. 政府は神によって任命された者たち。

これを信仰的な方向で見ると：

1. 父は長老や牧師によって勧められ、
2. 長老や牧師は神の御言葉のもとにあり、
3. 御言葉は預言者によって書かれ、
4. それはキリストによって与えられたものであり、
5. キリストはそれを父から受けている。

この神聖なパターンに従って生きるほど、私たちの保護、祝福、平安、喜びは増大します。この祝福の流れは、神の御霊を宇宙全体に行き渡らせる巨大な灌漑システムにたとえることができるでしょう。それぞれの家族は、祝福を受け、それを感謝とともに源へ返す流れの中継基地となります。それぞれのコミュニティ、教会、そして国家もまた、この仕組み原動力として機能し、神の아가ペーに満ちた祝福が人々に行き渡るように働くのです。

神と御子のご自身のアイデンティティを忘れるなどということはあり得ません。祝福の泉は流れ続けます。聖書にはこうあります：

わたしは主である。わたしは変わることはない。—マラキ
3章6節

イエス・キリストは、昨日も今日も、そしていつまでも同じです。—ヘブライ 13章8節

父と御子は決して変わることはありません。神の御座から湧き出る命の泉は決して止まることはありません。しかし、その流れに断絶があったことを私たちは知っています。罪の導入が、神の規範の法則を変えようとする思考の始まりでした。この無法の起源

は、神のアガペーが自己中心のエロスへと堕ちたルシファーに始まります。聖書には、サタンがいかにして神のかたちを変えようとしたかが記されています：

ああ、明けの明星ルシファーよ、あなたは天から落ちてしまった。もろもろの国を倒した者よ、あなたは切られて地に倒れてしまった。（13）あなたはさきに心のうちに言った、（14）『わたしは天にのぼり、わたしの王座を高く神の星の上におき、北の果なる集会の山に座し、雲のいただきにのぼり、いと高き者のようになろう』。イザヤ 14 章 12～14 節

これらの聖句には、神の模範による保護や配慮を受けることを求めるのではなく、単に、いと高き者と似た者となろうとする存在が描かれています。サタンは、自分が持つすべてを受け取ったものという真実を拒否し、神ご自身と同じ立場に立とうとします。もともとサタンは、自分のすぐ上にいる御子と同等の者になろうとしていました。キリストの権威の下にいることを拒み、キリストの下に属さず、キリストを介さずに、直接父なる神に報告したかったのです。父なる神は神の模範を通して、御子を守り、保護するために行動し、キリストがすべての被造物に対して持つ関係を宣言しました。キリストは自らを弁護したり、弁明したりはしませんでした。これらはすべて父なる神によってなされました。サタンは御子を崇拜し敬うという父なる神の命令を拒絶し、それ以降「いと高き者とまったく同じ存在になりたい」と望むようになったのです。

いと高き者とみなされたいというサタンの願望が、私たちの最初の両親に告げられた「あなたは神のようになり、決して死ぬことはない」という嘘を語りました。ルシファーは光を運ぶ者として創造されました。神は他のどの被造物よりも多くのものを彼に与えました（エゼキエル 28 章 14 節）。ルシファーは与えられたすべてのものを見て、それが確かに与えられたこと、そして自分が多くのものを受け取る者として祝福されていることを不思議と忘れていました。彼が持っていたすべては、神の御心によって御子が創造したものでした。もしルシファーが、御子から受けたことへの感謝の念を持ち、父なる神に従い、服従と感謝に満ちた御子

に倣い続けていたなら、神聖なパターンから外れて罪に堕ちることはなかったでしょう。罪の根源は、「自分がすべてを神の御子から、そして神の御心によって受けている者である」というアイデンティティを忘れることです。

もし、父と子の源と通路の関係が混乱するようなことがあれば、私たちの心の中で神聖の規範は崩れ、私たちは祝福の通路から外れてしまいます。この原則を覚えておくことは非常に重要です。

しかし、私たちはみな、顔のおおいなしに、鏡のように主の栄光を見つめ、主の霊による栄光から栄光へと、主と同じかたちに変えられていくのです。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。ーコリント 3 章 18 節

被造物である私たちは、自然と、私たちが神と認識するものの姿に似ていくのです。神をどのように理解するかによって、私たちは何を目指すかが決まるのです。サタンは、人類に性質というよりも力、知識、そして命において、私たちが神のようになれると思わせる概念を持ち込みました。アガペーの安心性は、神の御子が父からすべてを授かったという確信の中にあります。先ほども述べたように、御子が御父を惹きつけるような独立した性質を持っているという考えは、神が常にアガペーのみであるという真理を破壊します。神が本質的に力強いものに惹かれるという理解であれば、神は本質的にエロスであり、美しく、力強く、荘厳なものを愛する者になってしまうのです。

神の御子がすべてのものを父から受けられた者であり、御父が御子を御自分と同等にされたのは、御子に固有の何ものでもなかったと理解することができれば、アガペーの原理を心から守ることができるのです。神の御子の正体を知ることが、アガペーの源泉に留まり続ける秘訣です。イエスはこう語られました：

「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通してでなければ、誰も父のみもとに行くことはできない。」ーヨハネ 14 章 6 節

御子を持つ者は命を持ち、神の御子を持たない者は命を持っていない。ヨハネの手紙一 5 章 12 節

夫婦がアガペーの愛の原動力として関係を保ち続ける秘訣は、私たちには唯一の主イエス・キリストがおり、万物はこの主によって存在しており、私たちもこの主によって存在しています。（コリント第一 8 章 6 節）この神聖な模範を心に刻むなら、私たちは神と御子の関係性を人間の領域で映し出す「かたち」へと変えられていきます。神が最初に語られたように、私たちは「神のかたち」に創造されたのです。

人類の歴史の流れの中で、私たちがただ「そのように生きる」と選ぶことができれば、それはどれほど素晴らしいことでしょう。しかし、人間の墮落がどれほど恐ろしいものであったかを理解すると、それがいかに困難であるかが分かります。蛇がイヴに語った言葉、私たちが神のようになり、決して死ぬことはないという約束は、私たちにとって悲惨な結果をもたらしました。

4. 魔女とその弟子

エデンの園に存在したオリジナル・ラブを考察する中で、アダムとイヴという人物の中に、永遠の愛の原動力が、地上に約束された民に向かって流れ出すように設計されたことを発見しました。アダムからイヴへと注がれる祝福と、イヴからアダムへと返される感謝は、二人の間に絶えず愛を供給し続けることになりました。指導権と従順という原点にしっかりと根ざし続けることは、彼らが持つすべてのものが、慈悲深い神のアガペーによって与えられたことを常に思い起こさせてくれるでしょう。

この美しい庭園で、愛の奔流がどれほど長く続いたのかは語られていません。しかし、悲しいことに、この愛の原動力を停止させる出来事が起こりました。私たちはこれらの出来事を注意深く検証し、どのようにして本来の愛が砕かれ、墮落した愛、すなわち「エロス」に取って代わられてしまったのかを考察していきます。

何らかの理由で、イヴは禁断の木のそばに立ち、神がその実を食べることを禁じた意味を思い巡らせていました。その時、蛇から聞こえてきた知的な声は、好奇心と不安を掻き立て、彼女の心をとらえました。

彼は彼女に言った。「園のどの木からも食べてはならない
と、本当に神は言われたのですか。」－創世記 3 章 1 節

イヴは、神がすべてのものを夫に与え、夫を通して自分がこれらすべてを神から受け継いでいることをよく理解していました。神の直接の命令に関する問いは、何が真実なのかという疑いを、彼女の心に抱かせようとする試みでした。神の言われたことに疑問を抱くという考えイヴにとって新しいものであり、彼女が蛇との対話を続ければ続けるほど、彼女は神の創造における自分の立場から遠ざかっていきました。神を擁護するようという誘惑は、祝福の道から外れようという誘いでした。この問いかけは、自分自身で問題に対処するようという誘いであり、彼女は、知らない外部の質問者に対して、夫の庇護と保護なく話すべきではないという原則を忘れてしまいました。この時、彼女は黙ってその場を去るべきだったのです。

彼女の答えからは、完全に冷静な状態ではなかったということがうかがえます。恐怖や重圧を感じている時、私たちはしばしば、その過剰な防御によって疑念が心に入り込むのを防ごうと、自分の主張を誇張してしまうことがあります。

女は蛇に言った。「園の木々の実を食べることは、わたしたちに許されています。(3) しかし、園の中央にある木の实については、神は『それを食べてはならない。**それに触れてもいけない。**あなたがたが死ぬことになるから』と言われました。」創世記3章2～3節

しかし、神がアダムに語られ、彼がイヴに伝えた言葉とは何だったのでしょうか。

しかし、善悪を知る木の実を**食べてはならない**。それを食べた日には、必ず死ぬであろう。創世記2章17節

神は「食べれば死ぬ」と明確に語られましたが、イヴは不安のあまり「触れても死ぬ」と言葉を加えてしまいました。これはサタンにとって絶好の機会でした。彼はその実をイヴの手に渡すことで、イヴは自分が触れているという、そして実際には死んでいないという明白な証拠を目の当たりにしました。サタンはイヴ自身の言葉を用いて神が嘘をついたかのように見せたのです。

任命された守護者に頼らずにこの状況を対処できるという自信が、彼女を神が真実を語っていないかのように見せかける状況へ導きました。神を守りたいという彼女の思いが、皮肉にもサタンがイヴに神への疑念を抱かせるための道を開いてしまったのです。なんと狡猾な敵なのでしょう！彼の議論は実に魅惑的でした！

イヴは自分が悪霊と対話していることに気づいていませんでした。ただの悪霊ではなく、すべての悪の源である霊的存在と対話していたです！確かに彼女は何が起こっているか理解できていなかったかもしれませんが、彼女は自信に頼ることなく、すべてを与えてくれた夫、神からの守護者であり盾である夫に委ねられるべきだったのです。

イヴが神の信頼性を疑うに足る「明白な証拠を」突きつけられたのを見て、ルシファーは、アガペーに対する攻撃を仕掛け、エロスを最高原理とする戦いを始めました。

蛇は女に言った。「あなた方は決して死ぬことはない。

(5) それを食べると、あなた方の目が開かれ、あなた方が神のようになり、善悪を知る者となることを神は知っているのだ。」—創世記 3 章 4～5 節

この「決して死ぬことはない」という言葉の中には、私たちの命は神に依存するものではなく、私たちが自然に所有しているものだという致命的な異端の種が含まれています。これに、自然界から何かを得て、自分自身の命や力、価値を高めることができるという考えが加わると、人間は創造主から完全に切り離されてしまうのです。この嘘を信じれば、女性が男性から生まれ、男性から命を与えられたことに対する自然な感謝の気持ちが失われてしまいます。加えて、彼女はもはや、自分に与えられた自然界のすべてへ感謝する必要がなくなります。なぜなら、彼女は自らの「勇氣」と努力によって、女神としての真のアイデンティティへと高めてくれる道を見つけたからです。彼女はもはや「男性の支配と統制」に屈することなく、自らの内なる神性を見出しました。その道とは、慈悲深い蛇の知恵によって彼女に明らかにされた彼女の本来の神性を単純に認識することでした。

蛇の言葉が効果を発揮し始めたのは、彼女が突然その実の中に何かを見つけたからです。

その木は、食べるに良く、目に慕わしく、賢くするとみて、女はその実を取って食べた。—創世記 3 章 6 節

蛇の種は、彼女にその木を本質的に善いもの、「目に心地よいもの」と思わせました。イヴはその実に自分の価値を高める何かを与えてくれると考えました。そして、その実を食べることで、神が語られた現実とは正反対の新しい認識を受け入れる決意を固めました。

ここで何が起ったのかを見逃さないように、注意深く見ていきましょう。イヴは悪霊と対話していました。そして、その霊の言

葉に従って実を食べた時、悪霊に心を明け渡してしまったのです。そのため、アダムの元へ戻った時、彼女は悪霊に取り憑かれていました。さらに悪いことに、彼女は神のようになるための魔法の力を約束する悪霊のメッセージを携えていました。つまり、定義上、私たちの最初の母は魔女だったのです。

木から戻ってきたイブは、サタンの支配下に置かれています。彼女は今や従順な妻としてではなく、新たな宗教の教師として夫のもとにやって来ました。アダムがイヴの前に立った時、私たちは、古代デルフィなどの女性神託者の前に立ち、未来の運命を知ることと約束された、歴代の男性たちの前兆を見ることになります。アダムは、自らの骨から生まれた妻を見つめ、もはや彼を主人とも恩人とも認めない霊と接触します。彼女は別の魂の伴侶、別の教師を見つけ、誰にも服従することなく、彼女の心が望むすべてを満たすと約束された道に向かっていました。彼女は教えられる者ではなく、教える者に、服従する者ではなく、服従させる者になったのです。今や闇の勢力に支配されたこの女性霊は、ルシファールの誘惑の手段として用いられ、アダムを弟子に仕立て上げました。

イヴからアダムの心に湧き上がったのは感謝の霊ではなく、別の霊、落ち着きのない、興奮しやすい、官能的で、誘惑的、そして欺瞞的な霊でした。アダムがイヴを見つめると、彼女は視線や色気によって彼を惹きつけ、自らの肉体を誘惑の道具として使い、アダムを自らの新たな「神聖な姿」の奴隷としようとしていました。アダムは、愛する妻を装うこの魔術師の蛇/セイレーンの叫び声を聞きます。彼女は彼の死体を食らおうとする吸血鬼の霊に取り憑かれており、その灰からニムロドの姿の不死鳥を産み出そうとしている。アダムが思い起こすべき言葉は、次のようなものでした：

「命令はともしび、教えは光、訓戒の叱責は命の道である。（24）あなたを悪しき女、滑らかな言葉で誘惑する異邦の女から守るためである。（25）彼女の美しさに心を奪われ、まなざしに捕らわれてはならない。（26）男は淫らな女によって一切れのパンに導かれ、姦淫の女は貴き命を狙うのである。―箴言 6 章 23～26 節

アダムは魔女の媒体を通して蛇と格闘しています。ルシファーは魔術師を通して魔力を用い、アダムを新たな宗教に引き込もうとします。命は彼女の手委ねられていると約束しますが、アダムの心の中ではそれが死であることを悟っています。

あなたを異国の女、言葉巧みに誘惑する女から救い出すためである。(17) 彼女は若き日の導き手を捨て、神との契約を忘れる。(18) 彼女の家は死に向かい、その道は死に通じている。―箴言 2 章 16～18 節

アダムは妻が既に死んでいることに気づいていませんでした。夫を通して神への感謝の気持ちで満ち溢れていた、優しく従順な妻が、善悪の知識の木のもので死んだのです。この女性の息子として、私は、あの木のもとで殺され、地獄のように邪悪な霊に置き換えられてしまった、哀れな愛しい母を悼みます。しかし、それ以上に悲劇なのは、イヴの心に宿っていた優しく従順な霊は、まさにキリストの霊であり、彼女がその実を食べたことで、キリストを十字架に釘付けにし、キリストは世界の創造の時からほふられた子羊となったのです。

アダムは、その実を食べることでこの暗闇の地に入り、哀れな妻を救えるのではないかという淡い望みを抱いていたのでしょうか？ 悪魔に立ち向かい、打ち勝てると信じていたのでしょうか？ 私たちの父アダムと彼が経験した悲劇を思うと、私の心は痛みで満ち、「お願いします、父よ！ どうか私たちのアガペーの父に罪を犯さないでください！」と叫びたくなります。しかし、残念ながら、私の声は彼の耳には届かず、彼は実を取って食べてしまいました。

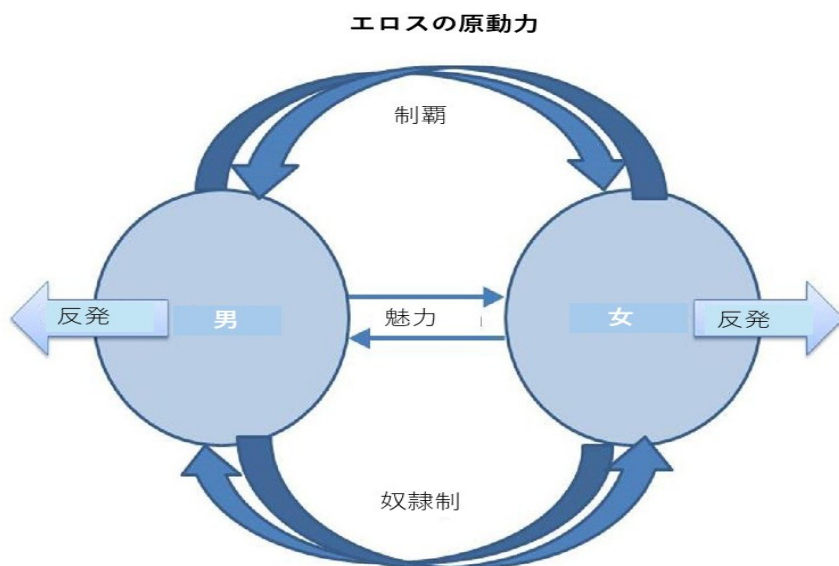
こうして新しい世界秩序が誕生しました。アダムは女性の奴隷となりました。女性が教師となり、彼は生徒、あるいは弟子となったのです。男性の中には、女性に人生を託すことがあります。しかし同時に、実を食べた男性もまた、女性にも他の誰にも支配されないという決意を抱くようになるでしょう。こうして二人は今や、享受と支配の権利をめぐる両性間の戦いに巻き込まれることとなりました。私たちは相手に本質的な力があると信じる時、人生は自分が惹かれる対象を「所有し、支配する」ための戦いへと変わります。

支配者からの祝福と、従順者からの感謝を解き放つ、本来の愛の原動力の純粋さと無垢さは、相互の魅力と反発の駆け引きへと変わってしまいました。これは、正反対のものが惹かれ合うという、いわば新しい世界だった。この新しい世界では、すべての魂は本来不滅であり、他の不滅である存在と融合することで、本来持つ力を高めることができると教えます。この新しい官能的な愛の秘密は、自分を高めてくれる相手を引き寄せることであり、決して支配されないことにあるです。男女の親密さという新しい経験は、誘惑と慎重な操作が混ざり合ったものであり、肉体を見せて心を隠すという構造にすり替えられます。かつて存在した感謝と尊敬の絆の中で永続的な循環をもたらした神聖な愛の美しい経験は、行ったり来たり、相互の魅力と反発が入り交じる、粗野な新しい現実にとって代わられました。束の間の快楽は、空虚感、そして嫌悪感にさえ取って代わられ、²この新しい心の欲望は常に求め続けながらも、決して満たされることはありません。男女の新たな行動は、キリストの精神を全世界に広める愛の輪ではなく、邪悪なブラックホールのように進路上のすべてを飲み込む磁力のような吸引力になったのです。アガペーの原動力の優れた点は、関わるすべての者が、自分たちの持つものはすべて神から与えられたものであり、神がアガペであるからこそ、私たちが必要とするものをすべて与えてくださるという確信がそこにはあるという点です。一方、エロス原動力は、自ら求め、自ら所有することが前提であり、決して満足したり満たされたりすることはありません。

イヴが悪魔に取り憑かれた魔女だったと考えると、衝撃的かもしれません。それはアダムにとっても同様だったでしょう。アダムはイヴを見た時、彼女のように美しく繊細な女性が、そのような邪悪なものを示唆するはずがないと感じたに違いありません。多くの現代人はイヴの行いを些細なことと考えがちです。確かに彼女が騙され、自分に何が起こったのか理解していませんでした。しかし、だからこそサタンは彼女を利用したことで、アダムの墮落というより致命的なものとなったのです。では、男性は女性を「墮落の原因」として責めるべきでしょうか？決してそうではあ

² この例として、サムエル記下 13 章 10-15 節をご覧ください。アモンは情欲に駆られて妹を強姦し、その後彼女を憎みました。

りません。人類の運命は最終的に彼に委ねられており、彼は人類の長として致命的な決断を下したのです。指導者であるということは、人類の墮落の責任はアダムにあるということです。男女間の問題を完全に理解するには、創世の始まりに何が起こったのか、そして私たちがどのようにして本来の愛から墮落したのかを、できる限り深く理解する必要があります。



聖書には「心が二つに分かれている人は、道のすべてにおいて不安定である」と書かれています（ヤコブ 1 章 8 節）。男性が二心を持つこと、つまり、自分が女性の主人と奴隷の両方であると感じています。男性は女性を宝のような存在であると見なし、必要なものは彼女が与えてくれると期待する一方で、彼女を支配・制御したいとも願っているのです。この二心があることで、男性は妻を祝福し、妻がその支配性を尊び、敬意を表すという関係性を築くアガペーの愛へと戻るための神の計画を理解することができないのです。新しい宗教の女祭司である女性は、男性を従者と

して従わせたいと願う一方で、男性の力強さと好戦的な性質に夢中になりながらも、同時に恐れを抱くのです。

互いに「引き出す」ことを求めながら、同時に支配しようとする二者の関係は、必然的に自己崩壊を招きます。消費主義と支配の原理は、本質的に破壊的であるため、永遠を捉える力を持ちません。新たな種の導入がなければ、墮落した人間の経験は、相互の引力と反発を生むエロスの原動力によって、まさにエデンの園で終わっていたでしょう。真空の力によってそれを破滅させたのだ。キリストの霊は罪の入り口で拒絶されたが、女の子孫としてのキリストの死の約束は、アダムに残された者たちが、再びアガペーの王国へ回復される一筋の道を開いてくれました。

5. アガペーの約束された種

カナダガンの鳥の渡りを思い浮かべると、私はいつも驚嘆させられます。彼らは本能的に北極圏からアメリカ合衆国南部へと渡り、厳しい北極の冬を避けて生き延びます。天の父なる神は、ガンという種が生き残れるよう、何千マイルもの距離を驚くほど正確に移動できる本能をガンに授けました。もしガンの持つ方向感覚が、誤って「北極」へ向かわせるものであったならどうなるでしょう？それはどれほど悲惨なことでしょう。ガンの群れは瞬く間に壊滅してしまいます。

悲しいことに、これは人類の最初の祖先が蛇の嘘を信じ、自分たちの命は本来自分たちのものだと思い始めた時に、人類に何が起こったかを物語っています。彼らの心は感謝と愛の気持ちで自然に神に向かう心ではなく、「北の果てに昇り、いと高き方のようにになりたい」という自然な願望を抱くようになったのです。（イザヤ 14 章 12～14 節参照）神のようになれるという嘘は、人類の方向感覚を根底から変え、本来、神に従い、命の源を礼拝する南へに向かうはずが、逆の方角、北へ人類を導いたのです。

かつては美しく稼働していたアガペーの双気筒原動力は、新たな衝動と力にさらされ、優しさ、忍耐、感謝を沸き出す泉から、自己満足のための利己主義、支配、欺瞞、憎しみ、嘘の奔流を吐き出す悪臭を放つ下水道へと変貌してしまいました。

イヴの心に毒の種が植え付けられ、サタンはそれを欺いてアダムの上に植え付けました。その種がアダムの聖なる心室に根付くと、アガペーの原動力となる設計図は破壊され、アダムの子孫の心にこのアガペーの原動力を再生させるように設計された遺伝の法則は、代わりにエロスの原動力となる設計図として受け継ぐことになりました。エロスの原動力となる設計図は、心を南へと飛ばし、すべての命と祝福を与える真の神に従順に崇拝するのではなく、北へと飛ばし、神々になろうとする心を駆り立ててしまったのです。

この小さな種は、人間の心の奥深くに深く根付いていました。神がアダムを眠らせて種を取り出すだけでは不可能でした。これは機械的な問題ではなく、むしろ霊的な問題でした。神がその種に

届き、それを滅ぼして、人間の心にアガペーの原動力を回復させる方法はただ一つしかありませんでした。この計画については創世記 3 章 15 節と 16 節に記されています。神はサタンにこう語ります。

わたしは、お前と女との間に、お前の子孫と女の子孫との間に敵意を置く。彼はお前の頭を砕き、お前は彼のかかとを砕くであろう。(16) そして女に言われた。「わたしはあなたの産みの苦しみを大いに増やす。あなたは苦しんで子を産む。それでもなお、あなたは夫を慕い、夫はあなたを支配するであろう。」—創世記 3 章 15～16 節

これは大きなリスクを伴う大胆な計画でした。アダムとエバの子孫である一人の子供が誕生し、悪魔と自らの領土で戦い、人間の心の奥底に潜む有害なエロスの種を滅ぼすのです。サタンはその戦いで彼のかかとを砕きますが、最終的に神はサタンを滅ぼし、人類に逃れの道が開かれるのです。この子孫の約束は世代から世代へと語り継がれました。アブラハムは、彼の家系から子孫が生まれ、地上のすべての家族が彼を通して祝福を受けるという約束を受けました。(創世記 12 章 1～3 節) この約束について、パウロは新約聖書の中でこう述べています。

さて、約束は、アブラハムと彼の子孫とに対してなされたのである。それは、多数をさして「子孫たちとに」と言わずに、ひとりをさして「あなたの子孫とに」と言っている。これは、キリストのことである。—ガラテヤ人への手紙 3 章 16 節

やがて来る子孫とはキリストご自身でした。キリストはアガペーの原動力と共に天から来られ、エロスの原動力に覆われた人類の中に生まれます。蛇の子孫は女の子孫を殺そうと試み、男のエロスの原動力を破壊するのを阻止しようとし、激しい戦いが繰り広げられます。この戦いは非常に激しく、キリストが人の心にあるエロスの王国の要塞に近づいたとき、父なる神に向かってこう叫びました。

それから、イエスは少し進んで行き、ひれ伏して祈った。

「父よ、もしできることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの思いではなく、あなたの思いのままになさってください。」マタイ 26 章 39 節

これから起こるこの大きな戦いについて、預言者イザヤはこう語っています。

多くの者があなたを見て驚いたように、彼の顔だちは、そこなわれて人のようではなく、その姿も人の子らとは違っていた—イザヤ書 52 章 14 節 (NKJV)

サタンとのこの心の戦いにおいて、神の御子は人類の一員として戦場に参戦する権利を与えられました。彼は有毒な種を含んだ人間の性質を身にまとい、それを滅ぼすために来られたのです。アガペーの愛の原理を通して、神の子は人間の心に道を開き、その有毒な種を憎み、敵意を抱く道筋を切り開かれました。そして、キリストはアダムの子孫であることが確実であったため、神はアダムとイヴの心にサタンの種に対する敵意を植えることができたのです。

キリストが来られ、あらゆる場面でエロスの原動力に抵抗しながらその狭い道を切り開いた後、キリストはその有毒な種を墓場まで持ちこんで、破壊することができたのです。

しかし、私たちは、ただ、「しばらくの間、御使たちよりも低い者とされた」イエスが、死の苦しみのゆえに、栄光とほまれとを冠として与えられたのを見る。それは、彼が神の恵みによって、すべての人のために死を味わわれるためであった。—ヘブル人への手紙 2 章 9 節

このように、子らが血と肉とにあずかっているように、キリストもまた同様に、それらにあずかられました。それは、死の力を持つ者、すなわち悪魔を、死によって滅ぼすためでした。ヘブル人への手紙 2 章 14 節

蛇の種を滅ぼされたキリストは、私たちのために歩まれた狭い道に沿って希望を与えることができました。キリストの足跡をたどるなら、私たちもあの有毒な種に抵抗することができます。私たちは第二のアダムであるキリストを信じる信仰によって、キリストの種を受け継いでいるのです（コリント第一 15 章 45 節）。そして、アガペーの愛という尊い泉が、再び人々の心に流れ始めるのです。神の御座から流れ出るアガペーの流れの中で、私たちが再び生きる機会を得られるよう、神が御子をこのような危険な使命に与えてくださったとは、なんと素晴らしい計画であり、なんと素晴らしい愛なのでしょう。

創世記 3 章 15 節に戻ると、神は女性の出産の苦痛を増大されたことが記されています。これは、二つの種の間葛藤の苦痛を象徴しているのです。アダムのエロスの原動力は確かに彼の子孫に受け継がれ、女性が耐える主産の痛みは、女の種と蛇の種との戦いを明らかにするものとなります。それぞれの子供はキリストからの光を受け、蛇の種への憎しみを抱くでしょう。しかし、蛇の種が新たな出発点となると、キリストからの新しい種を滅ぼそうとあらゆる努力を払うでしょう。すべての出産は、蛇の種を克服するためのキリストの苦闘と、人が光の王国に生まれるための偉大な苦闘を思い起こさせます。ですから、すべての出産において、私たちは真実が分かるのです。

肉の欲は御霊に反し、御霊の欲は肉に反するからです。この二つは互いに相逆らい、その結果、あなたがたは望むことを行えないので—ガラテヤ人への手紙 5:17 (NKJV)

創世記 3 章 16 節の最後の言葉には、女の種を通して回復がもたらされることを示唆しています。この言葉に対して、多くの人が直感的に否定的な反応を示しますが、これは私たち皆が受け継いできたエロスの思想の結果なのです。

「あなたはあなたの夫を慕い、
彼はあなたを支配するであろう。」

魔女とその娘たち、そして彼女たちに従う不運な弟子たちにとって、この言葉はいかなる犠牲を払ってでも抵抗しなければならない宣戦布告です。しかし、キリストが切り開かれた狭い道を歩む

人々にとって、この言葉は夫婦関係において回復されたアガペーの原動力という素晴らしい約束です。妻の夫への欲望は、すべてのものが夫を通して与えられたことを認識するアガペーの目覚めです。夫の支配は、妻が夫から生まれ、夫の愛と保護を受ける権利があることです。欲望と支配は、アガペーの約束を運ぶ二つのピストンであり、私たちを神の御座から湧き出る甘い泉のかたちへと私たちを戻してくれるのです。女性の心から湧き出るこの欲望は、キリストの精神そのものであり、キリストはすべてのものを与えてくださった御父に向けられた願いです。この欲望は、航海システムを正しい方向へと導き、私たちが感謝の気持ちをもって南へと、命の与え主の足元へと向かい、北から神のみを支配者として受け入れることを可能にします。創世記 3 章 16 節は、神の規範が回復されるという約束を伝えています。

6. エロスの暴君なる子孫

サタンは、時間を無駄にすることなくエロスの原動力を動かして暴力と荒廢の波を解き放ち、約束の子孫を倒そうとしました。

神は、人の惡が地上に増し、その心に思い描くすべてのことが、いつも悪いことばかりであるのをご覧になった。――
創世記 6 章 5 節

蛇の言葉に凝縮されたエロスの原理が、いかに速やかに水による全世界の浄化に繋がるのかを見るために、少しでも私たちの歩みを振り返ってみましょう。

アダムのもとに、サタンに憑りつかれたイヴが禁断の果実を手にして使者として現れたことを思い出しましょう。サタンはイヴを通してアダムを自らのエロスの王国に引き込もうとしていました。イヴはアダムを味方につけ、弟子にしようとしていました。そして新たな王国に入った今、イヴはアダムを何が起ころうとも傍らで支えてくれる力とみなしました。彼女は自らの美しさでアダムを魅了しようとし、彼が所有するに値する宝物としてその致命的な果実をアダムの前に差し出しました。この果実には、アダムが自らの宇宙を支配する新たな世界への希望が秘められていました。使者としてのイヴは、この新たな存在への入り口となりました。果実がもたらした当初の高揚感は、禁断の世界への冒険と相まって、すぐに空虚感と満たされない期待へと変わっていききました。これは、彼らがかつて経験したことのないむき出しと恥辱でした。アダムの失望はイヴにも伝わり、彼女もまた、夫が満足も感謝もせず、むしろよそよそしく、少し意気消沈し、おそらく少し苛立っていることに失望しました。

失望に繋がるこの約束の過程は、男女の関係において何度も繰り返されていることに注意しましょう。

裸の女性の姿という入り口は、男性に高揚感と夢の世界を約束します。女性を所有し楽しみたいという³根深い欲望は、知識の木の実を所有し楽しみたいというアダムの欲望の自然な延長線上にあります。蛇の嘘が私たちに内なる力を約束したことを思い出してくだ

³ この事実は多くの異教の宗教で儀式化されており、架空の小説『ダ・ヴィンチ・コード』で広く知られるようになりました。

さい。そして今、アダムはイヴを自分自身から生まれた者として見るのではなく、彼女を通して自分の神性に到達できる力として見ています。女性を惹きつけるために、彼は自分の力を誇示し、彼女に感銘を与えます。これが相互の惹かれ合う過程です。もちろん、女性が神聖な体験を提供することはできません。その瞬間のつかの間の感情はすぐに消え去り、男性は死すべき存在であり、以前よりも満たされないままなのです。ほとんどの男性にとって、これは悲惨な悪循環となります。男性の心の奥底では、裸の女性の姿が彼に生命、神性、そして神格を約束します。しかし、それが永続的な結果をもたらすことができず、空虚感、そして時には苛立ちを感じるのです。気分は一変し、男性は女性により要求を強め、彼が望むような永続的な体験をもたらすことを期待するようになります。女性は夫を喜ばせることができないという無力感から、凍りついたような絶望に陥るか、あるいは男性の執拗な⁴誘いとセックスへの執着に怒りと嫌悪感を抱くようになります。こうして相互の反発が循環を終わらせるのです。寝室での論争の多くは、園の果実と、魅惑的な裸の女性が約束した神性に直接起因しています。

これはエロスの循環です

1. 魅力
2. 期待
3. 所有
4. 失望
5. 反発

エロス思想の根底にあるのは、美しく、愛らしく、美味しそうに見えるものを所有することで、私たちが求めているものが得られるという信念です。しかし、これは失敗と破滅へと運命づけられています。なぜなら、本来の愛の物語は、私たちがそのように創造されたのではなく、そのような永続的な満足感をもたらすものを本質的に所有しているわけでもないことを明らかにしているからです。

⁴ ヘブライ語タミッド (ストロングズ H8548) ではイザヤ書 52 章 5 節「わたしの名は日々絶えず冒瀆されている」を参照。

このエロスの一連の過程の結果は、樹木から男性と女性の関係の歴史へと広がります。

神の子らは人の娘たちの美しさを見て、自分の好む者を妻にめとった。創世記 6 章 2 節

この聖句を注意深く見てみると、イヴと果物に起こったこととの類似点が分かります。

エロスの過程	創世記 3 章 6～10 節 エロスの起源	創世記 6 章 2～5 節 エロスの継承は夫婦関係に 現れる
1. 魅力（ヴィディ）	そして女は（H7200） ⁵ を見て	神の子らは見た（H7200）
2. 期待（ヴェニ）	その木は食用に適している（H2896）ということ、	人の娘たちは美しいと言われた（H2896）
3. 所有（ヴィチ） ⁶	彼女はその果実を取って食べた。	そして彼らは、自分たちの好む者を妻にめとった。
4. 失望	(7) ...彼らは自分たちが裸であることを知っていた。知っていた。	(4) 暴君だった子供たち ⁷
5. 反発	(8) アダムとその妻は身を隠した (10) ...あなたがわたしに与えられた女。	(5) 人間の悪は大きく、その心の思いのあらゆる想像は絶えず悪のみであった。

⁵ 括弧内の数字は Strong's Concordance からのものです。

⁶ ジュリアス・シーザーの名言「我は来た、我は見た、我は勝利した」（<http://en.wikipedia.org/wiki/Veni,vidi,vici>）を翻案したもの。イヴの場合、彼女は果実を見て、期待に胸を膨らませ、それを手に入れるために前に進み出た。

⁷ 暴君的な子供の出現は、夫婦間の争いや不和を意味します。

創世記 3 章 6 節の見た、良い、取ったという語順は、創世記 6 章 2 節の見た、ほど良い、取ったという語順と同じです。良いものを見て、それを自分の欲望のために手に入れることがエロスの根本原理です。神の子らは最初の母親と同じように誘惑されます。彼らは女性が肉欲的の糧として良いと見て、奪い、所有し、むさぼり食います。男性が女性に欲情するたびに、彼は木のそばに立って蛇から実を取っています。男性が女性に欲情するたびに、彼は女性には命を与え、自然界における自分の地位を高める力があるという嘘に誘惑されるのです。

美しい女性たちは、主が男性を連れて来てくれると信じて、家でただ待っているだけではなかったことは明らかです。彼女たちは、男性に自分を選ばせるために、利用できるあらゆる肉体美や特徴を強調していました。女性が鏡の中の自分の姿を見て「この格好で人目を引くだろうか？」と自問するたびに、彼女は木のそばに立って蛇から実を取っているのです。女性が、男性に自分の美しさを見てほしいという欲望を抱いて服を着ようとするたびに、彼女は必ずエロスの苦い実を味わうことになるのです。

男性と女性が相手を見て何かを得ようと欲するこの駆け引きは、魅力、空虚、そして嫌悪感という自然なエロスの循環を生み出します。

男性と女性の上に蓄積される負の感情は、次の世代の種となる。彼らは、自分が持つものはすべて親から受け継いだものだという知識を持って成長し、親を敬い喜ばせようと努めるのではなく、むしろ肉欲を求め、それを口にし、女性の裸体という入り口を通して神性を求める過程を全うしようとする。聖書は、そのような関係から生まれた子供たちについて、重要なことを述べている。

そのころ、またその後にも、地上に巨人がいた。これは神の子たちが人の娘たちのところにはいて、娘たちに産ませたものである。彼らは昔の勇敢な男たちであり、有名な人々であった。－創世記 6 章 4 節

「勇敢な男たち」と訳されている言葉は、力強い、戦士、そして暴君を意味します。見た目が良いからという理由で女性を選んだ人々の子孫は、園の情景を再現し、エロスの原理、すなわち自己

を喜ばせ、高めるものを求めるという原理に基づいて関係を築きました。数世代のうちに、この原理は世界を暴力と墮落の場に変えました。彼らの心の思いは、常に邪悪なことばかりでした。

神の子たちはキリストの優しい霊を受けることができたにもかかわらず、彼らは別の道を選びました。「美しい」という理由で女性を選んだとき、彼らの心はアガペーではなくエロスで満たされていたことが明らかになりました。これは、キリストの霊が拒絶されたことを明らかにしています。これらの男性は「これは私の骨の骨、私の肉の肉だ」と言っているのではなく、「やった！男だ！」と言っているのです。女性たちが男性を惹きつけようとした時、彼らもまたアガペーではなくエロスを選びました。彼らはキリストの霊を拒絶したのです。このような基盤の上に築かれた関係は、時の試練に耐えることはできません。必ず悪い実が結果として残ります。

もし私がこの過程を経て結婚し、肉体的な魅力が築かれた関係の中心であったことを認めたらどうなるでしょうか。神の御子を見つめ、神から来た御子だからこそ愛され、大切にされていることを知りましょう。（ヨハネ 17 章 8 節）私たちが御子のありのままを見つめるとき、私たちは御子の姿に変えられ、アガペーの愛をもって愛することを学ぶことができます。私たちの多くは、何十年もの間、誤った考えを持ち、伴侶に何かを求めて生きてきました。この考えはすぐには消えるものではありません。変わるための鍵は、神の御子がどのような方であるかを正確に知ることです。御子はすべてのものを与えられたので、アガペーの礎なのです。日々、御子について思いを巡らせ、御子の優しく従順な精神が常に父なる神の配慮の中で安らぐのを見るにつれて、私たちは御子のようになるでしょう。そして、御子を見れば見るほど、私たちは御子のようにになりたいという願いが強くなり、御子の精神が私たちの心を支配するように祈るようになるでしょう。御子がアガペーの精神を私たちに取り戻すためにどれほどの犠牲を払われたかを知るにつれて、私たちは感謝の気持ちで満たされるでしょう。そして、父がこの目的のために御子をお与えになったことを理解するにつれて、私たちの心はアガペーの真理を経験し始めるでしょう。ヨハネの手紙一第 4 章 8～10 節。

間違った関係から始まったのに、まだ結婚していないとしたらどうすればいいのでしょうか？これについては後の章で詳しく述べますが、簡単に言えば、神の御子に目を向け、自分のために所有したいという欲望を悔い改めることです。それは虚しさと悲しみ、そして潜在的な暴力につながるだけです。

ここまで読んで、「性的体験を楽しむべきではないとでも言うのですか？」と思う人もいるかもしれません。神は性という賜物を、適切な場所で楽しむために与えてくださったことは明らかです。ここで問うべきは、性を楽しむ動機と、それが男女の心にとってどのような象徴性を持つかということです。ここで示したのは、個人的な野心や欲望を求めることに基づいた性的行為は、魂に苦い思いを残す結果をもたらすということです。

男女の心に植え付けられたエロスの種は、彼らの関係に限定されませんでした。それは、他の力の存在を感じ取るときも、自然な過程として起こるようになりました。もちろん、エロスの王国では、あらゆるものが力となりました。木の実を食べるという経験は、自然界のあらゆるものが自己を高めるための潜在的な力となりました。他人の所有物は、魅力的な宝物となりました。他人の配偶者は、簡単に魅力の源となることができました。エロスの世界では、これらすべてが自然なこととなりました。唯一の疑問は、この力を直接的な力、あるいは巧妙な操作によって手に入れることができるかどうかでした。これが、人間の思考を絶えず悪へと向かわせたものです。創造された世界を、アガペーの父と御子からの贈り物として創造された世界を見るのではなく、あらゆるものが、神聖になるために奪い取り、所有すべき宝物となりました。

悲しいことに、エロスは目に見えるものに依存しているため、彼らを創造した目に見えない神は人々の心から消え去ってしまいました。存在する神が何であれ、目に見ることのできる自然界において働いてくれるものでなければなりませんでした。人類はすでにサタンの影響下に陥っていたため、神に対する彼らの自然な態度は、サタンが神に対して抱いていた欲望と似たものになっていました。サタンの願望は、言うまでもなく、神の全力と栄光のすべてを持つ神そのものになることでした。（イザヤ書 14 章 12～14 節）エロスの王国において、神だけが持つ力を獲得し、それを手

に入れることが、人間の最大の執着の一つとなりました。神の神聖な力を得るために神の庇護を得るという過程が、人間が作り出したあらゆる宗教の中心となりました。真の神を実際に知ることは重要ではなく、唯一重要なのは自然界で理解される力でした。そのため、人々は神聖を手に入れようと、あらゆるものを崇拜するようになりました。

なぜなら、彼らは神を知りながら、神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、愚かな心は暗くなったからです。(22) 彼らは、自らを知者と称えながら、愚かな者となり、(23) 朽ちることのない神の栄光を変えて、朽ちる人間や鳥、獣、這うものの像に似せたのである。ーローマ人への手紙 1 章 21～23 節

人間は、木の実と女性の使者を結びつけることで、自然界、特に女性原理を崇拝する宗教体系を築き上げていきました。多くの人にとって、性的体験は神聖なものへの入り口となり、やがて男性は女性だけでなく、他の男性や他の生き物、つまり力強いと感じられるものすべてに対して欲望を燃やすようになりました。これはすべてエロス原理の自然な延長に過ぎませんでした。神への祈りの過程は、所有するために求めるという単純な行為となりました。

あなたがたの中の戦いや争いは、いったい、どこから起こるのか。それはほかではない。あなたがたの体の中で相戦う欲情からではないか。(2) あなたがたは、欲するが得られない。そこで人殺しをする。熱望するが手に入れることができない。そこで争い戦う。あなたがたは、求めないから得られないのだ。(3) 求めても与えられないのは、快樂のために使おうとして、間違った求め方をするからだ。(4) 「不貞を働く男たち、女たちよ。世（エロス）との友情は、神（アガペ）⁸との敵対であることを知らないのか。

⁸ 世界は、それが神の本性であるがゆえに与える神とは対照的に、自己を求めるエロスの原動力を示している。

だから、世（エロス）の友となろうとする者は、神の敵となるのだ。ーヤコブの手紙 4 章 1-4 節

自然界を通して力を求めること、そして真の神に関する知識を歪曲することが、暴力と墮落を引き起こし、かつての世界は水によって滅ぼされました。人々はエロスの洪水に溺れたのです。女の子孫はこの悲劇にどう反応するでしょうか。

7. 神の悲しみ

主は地の上に人を造ったのを悔いて、心を痛められた。

—創世記 6 章 6 節 (NKJV)

一瞬一瞬ごとに、神の御座から大地に命を与える愛の恵みと力の力強い奔流が流れ出ます。雄大な丘陵には木々や草花が咲き誇り、多彩な色彩と香りが人々の住まいの背景を生き生きと彩っています。美味しそうな果物、風味豊かな野菜、そして、無数の味と珍味が人々の食卓に並びます。不死の神から湧き出る生命の鼓動で、何百万もの人々の心が高鳴ります。神は与えることを喜びとされますが、人間の墮落以来、それに応える感謝の響きも、心からの感謝もありませんでした。食事の前に感謝の祈りを捧げる人々ですら、その言葉は、話し手と聞き手に、ただ見たり、取ったり、所有したりするために来ただけなのに、本当に感謝していると確信させようとする敬虔な儀式となっていたです。

彼らはそれを「イヤイヤ期」と呼びます。愛する小さな子供が初めて顔をしかめて「いや！」と言ったときに親が経験する痛みと衝撃です。そんな反抗心や幼い愚かさが、すでに子どもの心の中に根付いているのです。母親がよちよち歩きの子供と買い物をしていると、子供は気に入ったものを見つけ、本能的に手を伸ばして取ろうとします。エロスの種がすでに有毒な果実を実らせています。母親はその願いが自然と消えることを期待して、静かにその場を通り過ぎます。けれども、子どもは叫び声をあげ、劇的な出来事が本格的に始まります。今や、母と子の意志がぶつかり合う状況となり、子どもは棚の品物を次々と引っ張り出して欲求を訴え続けます。母親は、子どもをなだめるために何かを与えるか、それとも泣き声やわめき声、あらゆる手段で欲しいものを手に入れようとする子の行動に耐え続けるか、選択を迫られます。この時期は、ほとんどすべての親からの指示が、子どもによって拒まれ、反抗されます。これこそが、人間の本性そのものなのです。多くの人々は、成長するにつれて、欲しいものを手に入れるために、より巧妙に、より計算された方法を身につけていくのです。

「イヤイヤ期」は、しばしばより混乱を極める 10 代前半の思春期の時期の前兆に過ぎず、舞台となる闘いの場はより複雑になりは

しますが、抵抗の本質は変わりません。ある時点で、親は深い悲しみに心を沈ませるようになります。大切に育て、愛情を注ぎ、世話をした大切な我が子の思い出は、突如として大した意味を持たなくなり、それどころか、その思い出は時に脅しの手段として突きつけられます。その結果として生じた悲しみは、多くの親をこの抵抗を打ち砕く決意で戦いへの道へと向かわせます。母親は、繰り返される反抗や感謝の欠如、無礼な振る舞いに対して、父親に怒りを和らげるように懇願することがしばしばあります。中には、意志の強い思春期の子どもをなだめようと、次々と物を与える親もいますが、要求は増え続ける一方で満足度は低下し続けます。これこそが、魔女とその弟子が生み出す実なのです。

もし私たちが神の御座から物事を見ることができ、全人類がエロスの精神に染まり、神がアガペーの愛の証として惜しみなく与えてくださったものを奪い、手に入れようとする様を目の当たりにすることができたなら、私たちはようやく、神の悲しみを理解し始めることができるかもしれません。霊的な現実に関心を抱いた人々は、神の存在を認識する能力がほとんどありません。約束された種の小さな残り火だけが、良心の奥底にある静かな小さな声で、このすべてがアガペーの愛に満ちた心から惜しみなく与えられたのだと語りかけるのです。

人間が園のエロスの場面を繰り返すごとに、愛を受け取る存在としての自己認識は薄れていきます。自分のために多くを奪えば奪うほど、感謝の気持ちは薄れ、与える力も失われていきます。魅力が失望に変えるエロスの循環は、失望を紛らわすために、より強い獲得への欲求を生み出します。こうして依存症というものが生まれるのです。至福を約束するかのように見える行動に没頭しながら、実際には空虚感と憂鬱感を残すのです。依存症は、エロスが魂を完全に支配した姿そのもののなのです。

それに対して、アガペーの単純な原理は次のように述べられています。

…ただで受けたのだから、ただで与えればよい。—マタイ
10章8節

これはシンプルでありながら力強い原則です。自分が多く与えられていることに気づけば気づくほど、同じように与えようという思いが高まります。自分が祝福されていると知る者だけが、他者を祝福することができます。感謝の気持ちを持って生きる人だけが、豊かさと満ち足りた思いから本当に与えることができるのです。詩篇作者が宣言したように

あなたはわたしの敵の前で、わたしの前に宴を設け、わたしの頭に油をそそがれる。わたしの杯はあふれます (6) わたしの生きているかぎりには必ず恵みといつくしみとが伴うでしょう。わたしは永遠に主の家に住むでしょう。

—詩篇 23 章 5～6 節

感謝は杯を満たし、それが他者へと溢れ出していく。そして、この流れが始まると、それは波紋のように広がり、何百万もの人々の人生に影響を与えます。これこそが、地球上のすべての家族を祝福するために設計されたアガペーの原動力なのです。アダムとイヴは、感謝に満ちた偉大な愛の鼓動の源となり、その鼓動は大きな波となってすべての子孫へと流れていくはずでした。しかし今や、エロスの原動力が支配するようになり、かつて活力に満ちていた人間の魂は、所有したいという失望した欲望の砂漠と化しました。

神は世界中の人々を見渡し、アガペーの種に応じる者を探します。すべてが失われたように見える中、一人応じる人がいました。

しかしノアは主の目に恵みを得た。—創世記 6 章 8 節

私は、この詩の簡潔さがとても好きです。ノアは世界を見つめ、信仰によって自然界を超えて神の目の中に、恵み、好意、そして優しさを見出しました。ノアの心は感謝で満たされました。喜びの秘訣は、自分が祝福されていることを知ることです。宇宙の王座に座す方から祝福されていることを知ることです。神の喜びはどれほどのものだったのでしょうか。何百年もの間、神の恵みの奔流にほとんど応えられなかった後、ノアの魂に感謝の火花が輝きました。ほぼ全世界が荒廃している中、イエスの霊が人の心に宿ります。アガペーの種が人の心に宿っています！その結果、神はノアを通して祝福を注ぐことができ、人類を「エロスの種による

絶滅」から救う道を開かれました。ノアは、蛇の頭を打ち砕く、来るべき種の原型である。

神が恵み深い方であることを知ったノアは、そのメッセージに応えるすべての人々への祝福の経路となりました。神のアガペーを見ることによって、彼は世界に向けた恵みの媒介者となりました。彼のメッセージは簡潔でした。世界は終わろうとしており、彼が神を信頼している証拠として、その出来事に備えるために、神の命令により大きな舟が建造されていました。ノアを信じ、舟に入る準備をした人々は救われるでしょう。ノアを愚か者として拒絶した人々は、与えられた唯一の脱出手段を拒絶したことに気づくのが遅すぎたのです。

何世紀にもわたり、神の霊は人々に、エロスの原理から離れ、屠られた子羊に信仰を示す者に与えられる約束であるアガペーの種に応じようと訴え続けてきました。しかし、人々は反抗し、その墮落はますます深まっていきました。満足感は徐々に失われ、年を追うごとに、より過激で衝撃的な性的体験を求めるようになりました。子供たちはますます卑劣な欲望の犠牲者となり、自然の力を操って欲望を満たそうとするエロスの原理は、人間の犠牲と、想像を絶するほど倒錯した性的行為にまで至ったのです。

墮落した邪悪な男たちの快樂と気まぐれに身を委ねる幼い子供たちの鳴き声は、一体いつまで続くのでしょうか。このような凶悪な行為を目の当たりにされた神の悲しみを、誰が理解できるのでしょうか。日々、年々、そして世紀を超えて、すべてを与えてくださったお方を顧みることなく、人類は自分自身の幸福、快樂、幻想の追求が続けられてきました。それはもう止めなければなりませんでした。しかし、それでも神は、人々が望むならばと、逃れる道を与えて続けてくださいました。

神は 120 年間、墮落した人々にノアを通して語りかけ、警告し、懇願し、呼びかけ続けられましたが、人々は心を動かされませんでした。動物たちが整然と舟へと入っていくという驚くべき光景さえも、彼らの心を動かすことはなかったのです。彼らの心は動かされず、悔い改めもせず、救われることもありませんでした。

そして雨粒が落ち始めると、神に対する根深い感謝の欠如に満ちた生活が、終わろうとしているかもしれないと気づき始めます。

吐き気がするような意識が湧き上がってきます。怒りに燃える稲妻が大地を襲い、雷鳴が激しく地を揺るがすと、人々はかつて欲望のままに貪り食い、破壊した無垢な人々の顔を思い出しました。地はまるで嫌悪の行為として、このみじめな汚物を吐き出しました。自然は人間の邪悪さに呻き、そして今、エロスの有毒な種がその報いを刈り取る時が来たのです。自らの家が押し流され、異教の祭壇が砕かれていく様子を恐怖に震えながら見つめていました。恐怖の叫びが空気を切り裂き、罪人たちの口からは神への呪いの声が上がりました。神の忍耐は限界に達し、今や悪の大波と罪なき人々の虐殺は完全に食い止められました。人間はエロスの種を地に蒔き、今や地そのものが彼らの邪悪を生み出しました。人間の暴力は、地の暴力となって彼らに返ってきのです。神は、人が自らの選択の結果を人間に与えざるを得なかったことを深く悲しまれました。人は神を追い払い、これがその結末でした。

あなたは悪しき人々が踏んだいにしへの道を守ろうとするのか。(16) 彼らは時がこないうちに取り去られ、その基は川のように押し流された。(17) 彼らは神に向かって言った、「私たちから離れ去ってください」と、また「全能者は私達に何をしてあげられようか。」と。(18) しかし神は彼らの家を良いもので満たされた。ただし、悪者の計りごとはわたしには遠く及ばない。－ヨブ記 22 章 15～18 節

神が人間に与え、享受し、分かち合い、祝福の陰で生きることを望んでいたすべてのものが、蛇の子孫によって奪い去られてしまいました。神のこの悲しみを、いったい誰が理解できるでしょうか。それでもなお、洪水から八人の魂が救われました。約束の子孫はノアの心に希望の灯をともし、新たな始まりの約束を宿していたのです。

8. 祝福された人

大洪水によって、自分たちのものにしたいという果てしない欲望に支配された人間の卑劣な行いは地上から一掃されましたが、エロスの種はノアの子らに受け継がれ、人類に残されていました。ハムは父の裸を見ただけでなく、父が酔っている間に母と性的行為に及んだのです（創世記 9 章 18 節にはノアの息子たちが記されており、カナンも含まれていますが、ハムを彼の父と呼んでいます）。しかし、冷静さを取り戻したノアは、ハムが両親に対して犯した卑劣な罪に気づきました。洪水前にハムが目にした人々の邪悪な行いは、彼の中に新たな生命を見出し、世界に新たな悪の波を放つことになりました。

エロスによって不自然な欲望を満たすことを許したことで、彼は自分自身だけでなく子供たちにも呪いをもたらした。

ノアは酒から覚め、末の子が自分にしたこと気づいた。

(25) 彼は言った。「カナンは呪われよ。彼は兄弟たちの奴隷の奴隷となるであろう。」(26) また言った。「セムの神、主は祝福されますように。カナンは彼の奴隷となるであろう。」—創世記 9 章 24～26 節

ここに、重要な人間関係の原則が見られます。人が自分の利益だけを望み、それによって命を与えてくださった方を軽んじる時、そこに呪いが宿ります。そして、人がただ自分のためだけに求めようとするとき、その人は子供にも同じように自己中心的な生き方を教え、親や権威ある者から与えられた命と祝福を無視するようになるでしょう。

ハムの長男はクシュであり、クシュの長男はニムロデでした。父が自分の所有物でないものを手に入れようと望んだように、ニムロデも人生における祝福の不足を補おうと、軍隊を組織し、近隣の村や集落を征服して自らの王国を築き始めました。（創世記 10 章 10 節と 11 節）ヨセフスはニムロデについて次のように述べています。

「さて、神への侮辱と軽蔑を彼らに抱かせたのはニムロデでした。彼はハムの孫であり、ノアの息子の子であり、勇

敢で力強い男であった。彼は人々に、あたかも神の手によって幸福になったかのように、それ（力）を神に帰するのではなく、自らの勇気によって幸福がもたらされたのだと信じ込ませました。また、彼は人々を神への恐れから引き離すには、ニムロデの権力に絶えず依存させる以外に方法はないと考え、徐々に政治を専制政治へと変えていきました。…」ーヨセフス『古代史』第1巻第4章第2節

ここには、人を自ら求めるように導くエロスの自然な流れが見られます。

1. 自分に強さを見出しなさい（あなたは決して死なないだろう）

幸せは自分の勇気によってもたらされると信じる（自分の望むものを自分で手に入れる）

2. すべてを支配することを目指す（あなたは神のようになります）

もちろん、この流れが始まると、人はやがて失望に至り、やがて自らが欲望を満たそうとする相手から拒絶されるようになります。人々が他人から賞賛と崇拝を得ようとすれば、当然のことながら彼の試みは自然と反発を招き、結果として戦争が起こります。

こうして、ごく短期間のうちに、世界は再びエロスの流れと、所有し支配しようとする欲望に飲み込まれました。人々が、自分たちが所有するものはすべて神からの賜物であるという真実を拒絶するにつれ、その魂には利己主義という呪いが深く染み込んでいったのです。そして数十年のうちに、ニムロデは軍隊を持ち、性と自然崇拝に基づく宗教を築き、そして神を心から忘却した社会を持つ、自らの帝国を築き上げました。

再び世界は欲望に満ち、感謝の念を失っていた人々で満ち溢れていました。地上のほぼすべての家族は、命を与えてくれた者へのアガペーに基づく感謝と敬意ではなく、エロスに基づく魅力と反発の関係性の中で生きていました。再び人々の思考は、自らの神性を見出そうと必死になり、食物、セックス、権力、そして戦争のことばかりでした。ハムとニムロデの物語は、一つの利己的な

行為から、暴政がどのように発展し、軍隊が戦闘を仕掛け、家族を殺し、破壊し、粉碎していくかを教えてください。

主の目は、自分が祝福されていると信じる心の持ち主、その魂に感謝の香りが漂い、世界に新たなアガペーの原動力なりうる人物を探して、地上をくまなく見渡しました。神が、自分が祝福されていると信じる人を見つけることができれば、与えられた祝福によってその人の心が与え主から離れてしまう恐れなく、その人に祝福を注ぐことができます。ニムロドの利己的な帝国の中心に、まさにそのような男が見つかりました。彼は、周囲の欲望の荒野の中に生えた若々しい新芽のようでした。この人こそアブラムです。アブラムもまたエロスの文化の影響を受けていましたが、彼の心は、万物を創造した神を愛し、神の友となるようにと教えられるほどに優しくなったのです。

主はアブラムに言われた。「あなたの国、親族、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい。(2) わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。あなたは祝福の基となるであろう。(3) わたしはあなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者を呪う。地のすべての民族は、あなたによって祝福されるであろう。」創世記 12 章 1～3 節

神がアブラムを祝福し、彼は祝福されると言われたことに、よく注目してください。祝福された人だけが、家族と地域社会にとって祝福をもたらすことができるのです。神はアブラムを偉大にされるのは、彼自身の満足のためではなく、むしろ地上のすべての家族を祝福するためでした。しかし、この取引は単純なものではありませんでした。アブラムは、アダムから受け継いだエロスの種は、良いものはそれを求め、それを手に入れ所有しようと努力する者にしか与えられないという考えと闘わなければなりません。神がアブラムを祝福すると言われた時、ただ一つの条件がありました。それは、あなたの国を離れ、偶像崇拜に満ちたあなたの文化を捨て、私と共に歩むことです。しかし、強大な国家になることは、そんなに単純なことではないはずです！確かにそうだ！自分を高めてくれるすべての人脈や人々をすべて捨て、奇妙で時代遅れの習慣や慣習を持つ人々以外にはほとんど人がいない

荒野で暮らすのですか？これは、偉大で強大な国家になるための賢明な方法とは思えません。

それでもアブラムは命令に従い、慣れ親しんだ地を離れました。彼は偉大な国民となることとは正反対の道を歩みました。神は再びアブラムへの約束を再確認されます。

時に主はアブラムの前に現れて言われた。「わたしはこの地をあなたの子孫に与える。」アブラムはそこに、彼に現れた主のために祭壇を築いた。－創世記 12 章 7 節

アブラムは数々の試練に直面しましたが、中でも最大の問題は息子がいなかったことです。アブラムが大国を築くには、少なくとも一人の息子が必要でした。彼は信仰を続けるのでしょうか、それとも行動を起こすのでしょうか。約束をくださった主を信じるのでしょうか、それとも自ら約束を果たすのでしょうか。ある夜、彼がそのことを思い悩んでいた時、神が彼のもとに現れました。

アブラムは言った。「あなたは私に子孫を授けておられませんので、私の家に生まれた者が私の跡継ぎになるでしょう。」(4) すると主の言葉が彼に臨んだ。「この者はあなたの跡継ぎとなるべきではありません。あなたの身から出る者があとつぎとなるべきです。」(5) 主は彼を外に連れ出し、「天を仰いで星を数えることができるなら数えてみなさい。」と言われた。また主は彼に言われた。「あなたの子孫はあのようなになるでしょう。」(6) アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。－創世記 15 章 3～6 章

義を貫くための簡潔な秘訣がここにあります。それは、神があなたに祝福を与えてくださると告げられたことを信じることです。自分は祝福された者であると信じることです。それだけです！では、神は私たち一人一人に何を祝福してくださったのでしょうか？

ご自身の御子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡された方が、どうして、御子のみならず万物をも賜わらないことがあろうか。－ローマ人への手紙 8 章 32 節

神が御子を与えてくださったなら、神はすべてのものを惜しみなく与えてくださると確信できます。私たちはただ神を信じるだけでいいのです。それこそがアブラムのしたことです。

彼は主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。

－創世記 15 章 6 節

これこそが、あらゆる人間関係における喜びの秘訣であり、神のアガペーが魂に火を灯す火種となるものです。神は約束されたものを与えてくださると信じ、あなたがすでに持っているものすべてを神から与えてくださったと信じましょう。そうすることで、アブラムのように、あなたは祝福された人となり、祝福された人は、与えられたように自らも与えたいという思いに満たされるでしょう。

これが結婚生活における永続的な幸福をもらたす秘訣です。与えられたものすべてに思いを馳せれば、与えたいと思うようになるでしょう。それが神が私たちに示してくださった祝福された道です。得るべきものばかりに目を向ければ、得るために奪い取ろうとするようになり、それが私たち自身の荒廃をもたらす道です。あなたの配偶者が自分にふさわしい扱いをしていないと感じるならば、逆に「自分が受けるべき扱い」で相手に接するのです！感謝すべきことが何もないのでしょうか？神はあなたに食べ物と衣服を与え、住まいを与えてくださったではないのでしょうか？千本のバラの花を咲かせ、水面に光を踊らせてくださったのではないのでしょうか？日が沈み始める頃、空を輝く金色に染めてくださったのではないのでしょうか？あなたは本当に祝福をされていないと言えるのでしょうか？

当然のことながら、配偶者のどちらかが利己的で横暴な態度を取ると、この方法は非常に困難になります。けれども、神が与えてくださった光をしっかりと握りしめていれば、多くのことが悲し

みに包まれる状況の中でも喜びを見出すことができます。しかし、感謝すべきことが見つからなくなると、私たちは利己主義に屈し、もう一方の配偶者のように、利己的な後悔と自己憐憫に満たされてしまいます。

ハムとニムロデは呪われた者でした。なぜなら、幸福を求めて奪い取るという姿勢は、必ず失望につながるからです。もし私たちが幸福を求めて奪うなら、私たちは呪われた者の子であり、他者を呪う者となるでしょう。アブラムは祝福された人でした。もし私たちがアブラムの子孫であるなら、私たちは祝福された者の子であると信じなければなりません。

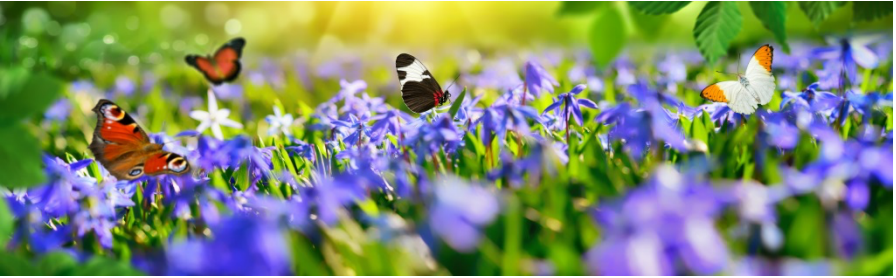
そして、もし私たちが祝福された者の子供であるなら、私たちは確かに祝福されているのです。

そして、祝福された者は祝福を与えるであろう。

ただで受けたのだから、ただで与えなさい。—マタイ 10 章 8 節

オリジナル・ラブ

聖書の愛の物語



結婚という制度は深刻な危機に直面しています。なぜこれほど多くの人が、結婚や人間関係において辛い経験をしているのでしょうか？『オリジナル・ラブ』は、聖書に記された本来の人間関係に着目し、私たち自身の人間関係をより良く豊かにするために、私たちが何を学ぶことができるかを探ります。活気に満ちた結婚生活のための重要な原則が詰まった 44 ページ。

詳細は、fatheroflove.info をご覧ください。